聖日蓮云く
正月は妙の
一字のまつ
り天照大神
を歳の神と
す
（諸遺六六七
秋元殿返事）

統一

現代思潮と
日蓮主義
大僧正　本多日生君

生活の價直
文學士　小林一郎君

伊豆伊東
の御靈蹟
關田養叔君

第二百三號

聖日蓮云く

春の始め三日、種々の物、法華經の御寶前に捧げ候畢んぬ、花ば開ひて果となり、月は出でゝ必ず滿ち、燈は油をさせば光を增し、草木は雨ふれば榮ふ、人は善根をなせば必ずさかふ、其上元三の御志、元一にも超へ、十字の餅滿月の如し（縮遺文一九二八頁上野殿御返事）

現代思潮と日蓮主義

本多日生君

日蓮上人の主義其者は即健全なる國民を作る處の大理想を敎へたものである、又人として健全なる覺悟を敎へたものである、決して或る宗派とか一派の敎義といふやうなものを以て目すべきものではない、故に此本領に基いて働きますれば國民的の活動に一致する處の性質を帶ぶる所のものがある、私は日蓮上人の敎は、國民として遵奉しなければならぬといふことを認めて居る、而して日本の現在の思想界を風靡して居るものは何であるか、疑もなく現實主義であります、利害得失のみを以て進退を爲して居る、是が各方面に顯はれて居つて、拜金主義となり或は何主義となつて種々なる方面に弊害を及ぼして居る、宗敎にしても種々なる方面に付て考へて見ると、確乎たる信念を有つて居るものがない、宗敎をやつても宗敎の信仰を以て滿足をしないのであります、どうも生きて居つても面白味がないといふやうな有樣である、それが今日の日本人の現狀である、一面には淺薄なる現實主義の思想に依つて滔々として種々なる弊害が顯はれ來る、一方には確乎たる信念が這入つて居らぬのである、此二つの種類に屬するものである、此二つの弊害といふものは實に恐るべきものである、古聖賢の言葉に、小人の道は適然として日に滅び、君子の道は晏然として明かであるといふが、市町村會にしても縣會にしても國會にしても、議論を發表する人は其問題が二年經つか三年も經つと全然要らないやうなものになつて了ふ、書物抔も非常に人氣があつても、其の本は三年も經つと二束三文で古本屋の店に出で居る、三年も經つと開けて讀む價値がない、それ程目前に適切のものであつても直ぐに亡びて了ふ、小人の道は適切であつても一日鄉つて置くと廢たれて了ふ、君子の道は晏然として日に昌えて行く、君子の道は萬世を通じて益々輝いて居る、此の如く思想界に於て重大なる根本問題が忘られて居ると云ふことは遺憾の次第である、現代の思想界とい

ふものは實に慨嘆に堪へぬのである、今の人はどうも一般に猜疑の念を有して居る、猜疑の精神を有つて居つたならば總ての力は拔て了ふ、本統の仕事が決して起るものでない、疑といふことは其人に取つては何でもないやうであるが、事を爲す時には何の力も顯はすことが出來ない、西に行かうか東に行かうか極つて居らぬやうであつては歩むことが出來ない、人間の精神の中に疑といふものがあつたら死んだも同樣である、諸君ビール罐を拔くことに就ても分る、コルクの拔けないのは本統の力を出さないからである、ビールの口を拔く位の力は男子は持つて居る、激しく拔いたならばビールが迸りはしないか、或はコルクが堅くて拔けないか知らぬと思ふて居るから拔ない、西洋料理の席杯に行くと美事に拔いて一つでも拔けぬものはない、此事は、催眠術をおやりになつた人は能く分る、催眠術は暗示に依つて掛るのである、暗示を掛けたならばどうにもなる、四斗俵が上げる力があつてもハンカチを擧げることが出來ない樣な始末である、そこで日本に於ては、道德の問題でも宗教の問題でも人生生活の問題でも、總てに於て疑を有つて居るものが多いやうである、大勢の人間の心に疑の心が起つたならば、其精神の基礎が定らないから政治を執り法律を布いても、其國が健全に發達するものでない、大勢の心に迷ひの心が起つたならばどれ程經濟論を盛にしても、どれ程殖産興業を盛にしても其人民の精神を安ずることが出來ない、人民は安寧幸福を送ることは出來ない、法律は益々緻密となり經濟問題は八ヶ間敷なつた丈で、國民は不安の念に陷るのである、其本は國民の精神の疑の起り迷ひより起つて來るのである、言葉を換へて言へば、健全なる信仰を以て居らぬから其處に不安の念といふものが益々盛になつて來るのである、眞正なる政治家が出たならば先づ以て國民の思想界に蟠つて居る所の疑といふものを除き去つて了ふ、さうして、始めて其上に國家といふものを安泰に治むることが出來るのである、健全に發達して來るのである、何事でも投げ遣りにして疑つて居つては積極的に害を爲さないでも、平和を維持し進歩を促がすことが出來ないのである、一度疑の精神が起つた時には幾ら教育があつても、其疑が表面には見えないけれども、結局それが總ての仕事の遣り損ひになるものである、今迄の國民の弊害といふものはそれである、故に現代の思潮を救ふに就ては、其現實の思想に對して根據の深き理想を與へて、さうして此現實の弊害を救はなければならない、立派なる解決を與へるといふ覺悟をしなければならぬ、そこに進むるには青年の薄志弱行の徒は本統の信念を得て居らぬから困難をして居るので、詰り薄べらなる現實の思想を以て居るがらである、人を用うるのに彼の人は怜悧であるといふて之を用ひて居る、本統に人間の德といふ者を有つて居るものを用ひない、會社でも何でもそれが爲めに失敗をして居る、之を矯正するには眞正なる道德眞正なる信仰といふものを發揮させなければならない、政治家は利害問題に就ては精神を二三にする、教育家は學說は巧であつても人格に於ては疑しい、機械的には教へて居るけれども人格に缺けて居る、法律家は法律の規則は詳くあつても正直を缺いて居る、商業家は商業は敏活であつても道德を缺いて居る、要するに人の人たる道に於て根本が一致して居らぬのである、抑も我日本には日本の國民性といふものがある、孔孟の學は我國の人心を涵養して居つた、儒教の健全なる精神佛教の健全なる精神是等のものを打つて一丸としたる眞正なる道を以て日本國民は立たなければならぬ、一夜作りの甘酒見たやうなものでは甘いものといつても、それは二日も經つと腐敗して了ふのであります、萬古に光を持つて居る者は矢張我國に於ける佛教の精髓を以て融合したる處の本統の日本人の道でなければならぬ、故に我々は今の思想界の現狀を考へますると、日本人は現在といふことを中心として居る、我皇室は天照大神に皈因して居る、其神勅を本とし國體として居るのである、其神を敬ふといふ精神は何處から來て居るか、唯現在主義許りでは仕方がない、國民道德の根本といふものは神勅にあるといふことを知らない、現實以上に神といふ觀念に

一致しなければ國民の道德は說けまいと思ふ、心の中にて最も尊しとするのは德を以て尊としなければならぬ、如何に金儲が上手でも喧嘩が强くても、人の人格といふものが無かつたならば何にもならぬ、人格のないものが威張つて居るやうなものである、人格のない土方の親分が一等室に乘つて縮緬の兵子帶を結めて居るやうなもので、腕に文身をして腕をまくつて喧嘩聲で傍若無人で居るのを偉いと思ふ樣ではいけぬ、我國に於ては三種の神器があつて日本の敎となつて居る、玉に鏡に劍である、鏡は吾々の精神道德に於て一點のくもりなきことを顯はして居る、日本國民の精神の本を爲して居る、卽ち神勅に於て天日と共に窮なからんといふことを宣はれて居る、此鏡の如き精神が日本人の思想の根據を爲して居る、如何なる學問が流行しても如何に世の中が複雜になつても、人間の心が鏡の如く至誠天地を貫いて迷はないやうでなければならぬ、此心がなければ日本の國民として本領を忘れて居るのである、我國の敬神の觀念といふものは、日本歷史上の淵源する處が遠いのである、深い所の根據のないやうに考へて居る人があるが、此敬神の觀念、此鏡の如き精神を土臺にせよといふことは、是が卽ち萬古變はらざる所の根本を爲して居る所のものである、暫く之を儒敎の方に對照して御覽なさい、孔子には三千の門人があつて、孔子は六藝に通じて居つた人である、今日であつたならば軍事にしろ政治にしろ總ての事に達した人である、聖人である、此孔子が三千人の學生を集めて色々のことを敎へられた時に、政治の事も殖產のことも敎えられたが、大凡人たるものは性と天道とを忘れたならば其處に道德といふものはないと、孔子はいつて居る、人間は此點を研究して其精神の本統の光を見出なければならぬ、ハイカラの美しい着物を着たり美味の食物を食つても精神が汚れて居つては何にもならぬ、卽ち理窟を敎へて居つても本統の光が現はれて來なければ何にもならない、之も聖賢の道では八ケ間敷のである、堯舜は聖人でありますが、其堯といふ聖人が何を傳へたかといふと、舜に政治を傳へたので

あるが長たらしいことを言はない、人間の心を本統に磨けといふことを言はれた、己が心の玉の光を本統に輝かすことを忘れたならば何にもならぬ、故に舜は其意味を擴げて說かれた、人間の心が腐つて來て道德を修めやうとして、精神が缺けて來たならば何事を爲しても駄目である、幾ら町會で善い事を議決しやうと思つても、其町民の精神が公共的道德的に進步しない時には千百の法律の個條を極めても何にもならぬ、一軒の中にて平和の進步を圖らうとしても、家內中の人間が美しい德を以て進まなければ悶着許り出來て何にもならない、經濟問題なり社會政策を盛にしやうと思つても、或は社會學者が世の中を作り變へやうとしても金持が貧乏人の問題を解決すると言つて無闇に施しを盛にしても、貧乏人が橫着根性を廢めなければ何にもならない、貧乏人が如何に心が立派であつても金持が慈善心がなかつたならば何にもならない、經濟問題でも富者と貧者が道德的に進んで來なければ駄目である、明判官があつても國民道德が衰へたならば、監獄が一杯になつて法律が何の効力を奏することが出來ない、總て人生問題は情神問題にして道德問題である、心が腐敗したならば何にもならない、是誠是一、此一つが本統に詳しく磨き上げられたならば、其人間の百般のことは悉く秩序正しくして進步するものである、是が舜といふ人に傳へた格言である、孔孟は種々に之を推し擴め日本人の思想界に於ても今尙傳はつて居るのである、皇誠是一、で精神を本統に磨かなければならぬ、

論語讀みの論語知らずでは宜しくない、そこで我國の天皇陛下より陸海軍に賜はつたる處の御詔勅に此精神が顯はれて居る、又敎育勅語に於ても此精神が顯れて居る、

其德目が十六ある、卽ち父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じといふ箇條から、一旦緩急あれば義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシといふ所迄數へ擧げれば十六箇條あります、此十六箇條は國民一般の心得となるものである、そこで此一つの眞心といふものが軍人に賜つたる所の五ケ條となり、忠節と爲

り、武勇と爲り、信義と爲り、或は質素と爲り、或は禮節と爲り、此五ヶ條になつて來るのである、此一の眞心を失へば忠節も信義も總て用うる所がない、此幾ら國が盛になることを心懸けても人間に道德信義といふものがなかつたならば、眞心が無かつたならば金持も要をなさぬ、軍人に賜はりたる五ヶ條の中にて質素を旨とすべしとあります、軍人にして金を愛するやうであつたならば志が無氣に賤しくなつて了ふ、經濟主義の思想許り鼓吹すると拜金主義の根性許りになつて來る、一切金を以て本位とするやうになつたならば如何でありますか、國を盛にすることは大事でありますけれども、今日の日本の國威國光を輝かすに至つたのは決して金許りの力ではない、今後も矢張其通り日本人は氣節を以て立たなければならぬ、精神を以て立たなければならぬ、教育でも政治でも精神を以て本としなければならぬ、何ぞ利を言はん慾張るものでない、天下の事は利のことは後にするものである、德は本なり財は末なりといふは前古動かすべからざる所の格言である、金持が威張て居るか、金持の頭を叩いてもさう金を出して呉れない、それであるから一つの眞心を以て貫くといふことが大事であります、日本人は此眞心の研究を忘れてはならぬ、人間は靈性を以て生れた一番高いものである、宗教に於ては之を信仰といふ、儒教に於ては之を至誠と言ひ、神道に於ては之を鏡に譬へたものである、近頃の教育家は詰く斯ういふ歌を繰返して居る、『心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らん』と言はれますが、信仰といふものがなければならぬ、眞心といふものは人の道である、至誠天地を貫ぬくといふことがある、誠は天地の正氣である、勃々として神淵に磅礴たる所の正氣である、少々嘘を突かない位の誠では何にもならぬ、彼の吉田松陰先生が誠といふものゝ解釋に骨を折つて居る、卽ち尊王の大義を唱へ德川幕府の捕吏の爲めに捕へられて江戸に下る時に、送別の席上に於て至誠のことに就て、至誠にして動かざるものは古より未だ之れあらずといふ意味を書かれた、至誠といふものは天地を感動させ

るものである、今度東の方に行くに就て身を以て此誠を盡さうと言はれた、茲に於て一坐は寂然として先生の議見に服したといふことでありますが、當年議論を爲し理窟をいふ時でない、至誠を以て當るの時であつたのである、日蓮上人が龍の口にて斬らるゝ時は、其刀が三つに折れて天變のあつたといふのは是は至誠の天地を動かし天地をして感せしめたのである、其至誠の力が顯はれて來たのであらうと思ふ、日蓮上人は此正しき道を傳へる爲めには、如何に敵が多勢なりとも必ず切り拔けるといふ決心を以て、我至誠は日月の光を放つものであると覺悟し、政治家と鬪つて勝利を占めたのである、人間として生れた以上はそれ丈の考は知つて居らなければならぬ、如何樣のことに依つて死なうとも如何樣の羽目に陷らうとも、人として眞心を盡したならば以て安んずべきである、如何に富み榮へても一時を欺いて居るのでは是程悲しいものはない、そこが考ふべき所である、人の生涯を送る所のものは根本の精神が何處にあるかといふことである、世を欺いて少し金を儲ける位のことでは夫婦して芝居見物にでも行つて樂を求むるに過ぎない、人間は淺墓なる所の物慾を除き去ることの出來ぬといふものは、卽ち禽獸と相去ること遠くないのである、昔しより日本人の夫婦は手を引いて歩くといふこと杯はしなかつたもので、さういふことをすると顏を眞赤にしたものであるが、今日は平氣でやつて居る、女子の貞節といふことは詰り夫を持つてから起るもので、夫といふものを持たなかつたならば女の貞節といふものは問題にはなるまいと思ふ、相手方が定まらなかつたならば操を守るといふことは起るまい、忠義といふことを言つても日本の如く皇統一系であれば宜いが、支那の忠義は始終代が變はるから忠義を盡さうとしても盡くすことが出來ない、親に孝行をしやうと思つても親無し子であつたならば、棄兒なれば孝行の道がないのであります、人間の誠を顯さうと云ふのには、どうしても偉大なる所の少くとも天地正大なる氣といふもの、神樣とか佛樣といふやうに無限の勢力が理想たる所のものであつて

誠といふものが動されて來るのである、今の政治家學者の中には其相手方を顧ずして、さうして人間の光を顯さうとして居る、是程愚かなる說はないのである、是は分らぬ議論である、

それで世の有識者に於ても、昨年より今年に掛けて世に所謂危險思想といふものが起つて來た實に恐るべきものである、是は宗敎家をして國民の精神を健全にせしめなければならぬといふやうな傾向になつて來て居るが、唯單に形式的にては神道にせよ佛敎にせよ敬虔の念といふものは養はれるものでないが、今說いて居る所の國民道德の根抵に向つて根本的の說明を與へなければならぬ、吾々は佛敎の言葉を借りて言へば、佛にもなれるものである、吾々は神樣の子である、忠良なる臣民であると同時に日本の神樣の子である、故に我々は神樣になることが出來る、此絕對の希望を以て世の中に存在すべきものである、それで吾々は一方に於ては宗敎的の信仰を要するものであるが、又生活上の欲望を有するものである、林子平の所謂親もなし妻なし子なし版木なし金もなければ死にたくもなしと詠まれたのも、矢張一つの生活の慾望を顯はして居るものである、此生活の慾望といふものは非常に力を持つて居るものである、人間の精神を支配して居るものである、肺病に罹つても未だ々々却々昨日より良いといつて居る、もう八十位になつても一寸押せば倒れてもそれで未だ〳〵元氣だと言つて居る、此生活の趣味といふものを尊重しなければならない、宗敎家であつたならば宗敎的の信仰と國民道德とそれから生活上の問題等が一致したる理想を取らなければならぬ、是が融合して居らなければならぬ、商業家は商業の趣味と國家の觀念と宗敎の信仰と合致しなければならぬ、此三つを捨てたならば如何に商賣が繁昌しても駄目である、敎育家に於ては生活の趣味を有し國家の觀念を有し宗敎の趣味を有つて居らなければならぬ、

現代の弊害を救ふには模範的の人物卓越せる主義を要する、而して之を求むれば日蓮上人なりと信ずる、日蓮上人は如何にお暮になつた人でありますか、首を

斬らるゝ時に於ても喜んで居つた、北國に居つて雪の中にて冷たくて食ふものもなく、簑笠を着けて寒風に吹かれて居るけれども、心に法華經を信じ居るから當世日本國に第一に富める者は日蓮なるべしと言はれて居る、命は法華經に奉り島流しにされて居つても、之に依つて名をば後代に留むべし前途に大なる光を放つと言はれ、大いに喜ばしいと言つて居る、島流しにされても意氣昇天の有樣で俊寬僧侶の比ではない、其精神は何處から來て居るかといふと、宗敎の信仰に依つて本統に誠の心を鍛いたからである、諸君が商業に失敗した場合に慓ひ聲を出すことを止めて、之が時と場合であると諦めて荒爾として更に奮發する所がなければならぬ、其處に本統の愉快がある、人間は如何なる場合に於てもさういふやうな喜びを失はないやうにしなければならぬ、即ち生活の意義と云ものは其處に存在して居るのである、苦しい場合にも面白い、樂しい場合には尙更樂しい、さういふ風にして生涯を暮すといふことは是は生活の一番宜いことである、日蓮上人を學べばそれが能く悟れる、此處にも書いてあるが、立正安國といふて正しき敎を立てゝ國を安らかにするといふことである、敎と國と一致して居る『法は必ず國を鑒みて弘むべし彼の國に好かりし法なればとて此國にも好かるべしと思ふべからずと言はれて居る』又斯ういふことを言つて居る『種々の大難出來すとも智者に我が義やぶられずば用ゐずとなり其外の大難風の前の塵なるべし我れ日本の柱とならん我れ日本の眼目とならん我れ日本の大船とならん等と誓ひし願破るべからず』生きとし生けるものを皆救はんと言はれて居る、日蓮は房州に於て朝日を拜して南無妙法蓮華經を唱へ、太陽の先づ日本を照らし後世界に輝く如く、其敎義を世界に輝かさうとされたのである、即ち日本の柱となり日本の眼目とならんと言はれて居る、現時に於ける幾分の現實主義を矯正するは敎育家の手を待つべきものであるが、宗敎家自身も之を改善しなければならぬのである、社會の弊風を矯正するには議論や演說許りでは何にもならぬのである、自分の爲すべき範

園を實行しなければならぬ日蓮の信仰といふものは熱誠である、首の座に坐つても喜んで居る、砂を見ても黄金の如く見えたならば是程喜ばしいものはない、人間の生きて居るのは身體であると思へば卑怯未練が殘るけれども、前途永久不滅の生涯を有するものである、といふことを考へたならば、必ずそこに立派なる精神が現はれて來るのであります、故に宗教的に宇宙に不滅の生命を有つて居るといふ所の信仰を有つて居りましたならば、非常に愉快なるものである、日蓮上人の教は生活の趣味といふことに就て説かれて居る、又「唯世間の留難來るともとりあへ給ふ可らず賢人聖人も此事はのがれず女房と酒うちのみで南無妙法蓮華經を唱へ給へ苦をば共と悟り樂をば樂とひらき苦樂ともに思念南無妙法蓮華經と打唱へ居させ給へ」と言はれてある、そこが無限の樂であると言はれて居る、夫婦家庭に居て不味いものを食べて生活をして居つても、其處に信仰の光が輝いて居れば豆腐一挺をつゝき合ひをして居つても道德の精神が發達して居つたならば、其不味い生活でも愉快であることは諸君も實驗される處でありませう、そういふ低い生活でも精神の結合といふものは其家庭は幸福なるものである、譬へ富を有し權力を有つて居つても、唯上はべ許りでは精神は悲しいものである、餘所へ行つて酒を飲まないでも家の女房と酒を飲んで何の不足のあるべきものでない、栗を湯で出たり里芋を喰つたりしても其中に樂は澤山ある、里芋を喰ぢりながら白酒を飲んでも其處に宗教の信仰があらば愉快である、宗教の信仰がなかつたならば美しき花を見ても美しくない、美しいとか趣味といふものは宗教の信仰と結合しなければならぬ、人間の趣味快樂といふものゝ中には信仰の光がなければならぬ、日蓮上人は身延山に對して斯う言はれて居る、誠に身延山の栖はちはやなる神もめぐみを垂れ天下りますらん心なきしづの男しづの女までも心を留めぬべし哀れを催す秋の暮には草の庵に露深く擂にすだくさゝがこの糸玉を連ぬき峯の紅葉いつしか色深ふしてたえだえに傳ふ懸樋の水に影を移せば名にしおふ龍田河の河上

もかくやと疑はれぬ又後ろには峨々たる深山そびえて梢に一乘の果を結び下枝に鳴く蟬の音滋く前には滔々たる流水堪て實相眞如の月浮び無明深重の闇晴れて法性の空に雲もなし」とある、彼の通り嶮しい何人も住めぬ所に手の掌許りの土地を平らかにして闇室を作つて、雪が降れば尋ねて來る人もないわびしい生活をして居つても非常に樂しい、身延山の生活は何んと善い所ではないか、神樣も其の景色にあこがれて居る、今迄は芝刈や蕨取が心を留めなかつたが、日蓮の住まうやうになつてからは實に此處を愉快なる土地と思はれて居る、斯ういふ喜びといふものが人間にはなければならぬのである、美しい家を建てゝ住まはなければ嬉しくない人間であれば實に悲しい人間である、美しい着物を着て金の指環を欲めなければ愉快でないといふ人間であつたならば實に哀れなものである、人はさういふことをしなくても心の泉から滾々として喜は湧いて來なければならぬ、指環を欲めて居る中は嬉しいけれどもそれを外づして了へば泣かなければならない、日蓮の教を信ずれば生活の趣味は其貧しい中に存して居る、其當時北條の幕府は盛であるに拘はらず、日蓮は之に對して斯ういつて居る、「日本國の武士の中に源平二家と申して王の門守の犬二疋候」と言はれて居る人間は死といふことを覺悟すれば何でも出來る何事でもやれる、人間の死ぬ時は總勘定である、そこで平和の眠りをする所の信仰を持たなければならぬ、國民道德と融合し國家的觀念を有し家庭の樂み生活の趣味を有つて、而して宗教の熱誠なる信仰を懐いて立といふことは、日本人の精神上に大切のことであらうと思ふのであります、若し此現在の弊風の滔々として居ることを打捨てゝ置いたならば、國家の前途は憂ふべきものであるから、皆々反省せられて立派なる信仰を得て善き教を取られて進んで行きたいと思ふ、國民道德の精神を發揮し、生活に對して趣味を有し、宗教に對して熱誠なる信仰を以て大國民として人生を送らるゝことが最も大事であります、

生活の價値

小林一郎君

私は此土地を踏みましたのは始てであります、其始めてに斯ういふ會に臨んで講演をすることを得るのは甚だ光榮に存じます、抑も我國は美しき歴史を有つて居る、而して此國の歴史をして更に益々立派にして行かうといふには、お互に自分の有り丈の力を盡して世の中に立つて事をやらねばならぬ、それで私は自分の知つたことを大勢の前で述べて御參考に供したい、

昔し斯ういふ話がある、天文學者の阿部の晴明が今日でいふと天氣豫報のやうなことを朝廷から問はれたのである、其時に大概何時まで定まつて居つた、明日の天氣を問はるゝと明日は雨降り候天氣に御座なく候といつた、雨が降ればそれで當つたことになるし雨が降らなくとも之で間に合つたので、どつちにでも通じたものであるから、是は世の中に處するのに上手の遣り方である、どつち付かずにやることである、學校の學生の方抔もさうである、今の學生は十年前の學生より進んで居るか知らぬが、誠に温和であるが、今の學生は小言抔を聽くのが上手になつて、大抵は頭の上を通らして了ふ、眞面目に講義を聽くといふことがない、大事に當つて自分の生命を賭してやらうといふ人が少くなつて居る、圓轉滑脱になつて甘くやつて行くといふ風になつて居る、何れの國でも其國に惡人が多くなつて亡びたといふことはなく、其國中の人が宜加減の人であつて眞面目でないといふ時に其國は危いのである、兎に角學問が進んでも教育が進んでも形の上に於てどれ程立派であつても其國内に自分の力のあらん限を盡して働くといふ氣力の人が出ないと、其國の前途は樂觀することは出來ない、そこで私は是より申上げたいのは生活の價値卽ち人間の生きて居る所の價値であります、人は此生活の價値といふものを能く認めなければならぬ、人は三十年も經ちますると、世の中の荒波に遇つて、人は非常に複雜して居つたことに遭遇すると、自分の側にピストルでもあります時は危いことなどは考へずに自殺を圖るが、幸に其ピストルが遠くにあつたから取りにも行かず死なずに濟んだといふやうなことがある、若し死ぬといふことが容易なことで出來るものなれば、お互に幾度死んだか知らない、大概の人は人間の生れて居る價値といふことを認めないのである、それは人を馬鹿にした話であるか知らぬがさうである、何の爲めに生きて居るか、是から先きどうなるかお互の頭の中に浮ばねばならぬ、そんな問題は却々解けない、人間は一日一日を送つて墓場に行く爲めに生きて居るのではない、兎も角生活に價値があるかないかといふことを眞面目に考へて見たい、此一生涯をどういふ風に送つたならば宜ささうに見えるが、之をぼんやりお話することが出來やうと思ふ、一體世の中は樂であるか苦しいがどつちかである、何人も滿足をして自分の仕事をして居るものは先づないと思ふ、私は巢鴨の東京監獄の典獄を知つて居る、其話に依ると數ヶ月前のことであるが、窃盜が捕つて送つて來られた、それは小學校の先生である、四十に近い人で、小學教育に從事して居つたが、窃盜は一度しかやらない、自分達は教育をやつて居るが、朝から晩迄子供の世話をして毎日食はずに積んで行つた所で死ぬ迄幾らも貯へられるものでない、月給を丸で貯へた所で一年に二百圓かそこらである、世の中を見ると少しも眞面目に働いて居らぬのに、何百萬何十萬といふ財産を積んで居る、實に馬鹿らしいものである、毎日々々理窟ばかり言つて居つても馬鹿らしい、是ではならぬから財産を作るには窃盜をする方が宜いといふ考へで、窃盜をやるに至つたのである、相當の財産を作る迄はやる、其代りにはどんな理窟を言はれても悔悟しない、どうぞ其積りで居て下さいと云ふことであつた、皆さんは妙に御感じになるでありませう、財産を作る爲めに窃盜をやるといふことである、斯ういふ有樣であるから是を打捨てゝ置くといふことは今日の時勢に於て捨て置くべきものでない、不正なることをやるなと教ひられても腹の底にて納得しない、露骨に言へば倫理修身の話を頭の上を通して聽いて居る思想

は純粋の個人主義である、それであるから今の人は六ケ敷ことに出合ふと尻込みをして了ふ、昨年は恐れ多くも無政府主義を唱へるやうなものがあつた、實に痛嘆すべきことである、斯ういふ事柄は其根抵より之を絶滅しなければならぬ、それで私は唯上はつら計りで理窟を唱へないで、眞から力を盡して忠君愛國の思想を鼓吹しなければならない、それでなければ國を賊する樣になる、忠君愛國といふものは自分を中心としては出來ない、忠君愛國は自分を犧牲にしなければならぬ、自分の全力を盡いで係らなければならぬ、敎へるにも自分の心全體を入れて自分の身體を全部擧げて係るといふ覺悟がなければならない、兎に角今日の場合は吾々は一生懸命にならなければならぬといふことを覺悟しなければならぬ、奮闘とか努力とか勉强とか節儉とかいふ立派なる言葉が繰返へされる繰返されることは都合が宜いけれども、今日の場合に於てはどうしても唯理窟の上許りでなく能く其本分を考へねばならぬ、

吾々日本人といふものはどんな地位に居るものであるか、どんな境遇に居るものであるといふことを能く考へなければならぬ、さうしてそれを知つた後に是から後は吾々はどんな態度を取て行かなければならぬか、日本の歷史は立派なる歷史である、萬世一系の天皇を戴いて居る、萬國に辱を受けない立派なる歷史を有て居る、それは立派なる國民となつて始めて立派なる光を放つのである、それでなければ今後吾々は立派に後を繼くことが出來ない、昔も立派であるが尙將來も立派にしなければならない、私は青山に住んで居りますが非常に小さい家に居つて情けない、夜遲い時電車のない時は車に乘つて返へるに酒屋の横で樱井さんの側といふて始めて解るのである、そう大い家に這入る資格がない、日本人も昔は立派な歷史を有つて居るといふのは、丁度私が隣の家の立派のをいふやうなものではないか、併し兎に角吾々は立派なる歷史を有つて居る者であるが、唯歷史が美しいといふ丈では安心が出來ない、吾々は日本が世界各國の間に於て未だ採

まれなかつたのである、それを列國の間に立つて立派なる歷史を續けて行かなければならぬ、日本人は理が非でも此立派なる歷史を續けて行く所の氣象を持つて行かなければならぬ、そうして此國を二倍も三倍も善い國にしなければならぬ、それ丈の覺悟がなければ南洋でも移住する方が宜い、是丈の覺悟が今日お互にあるや否や私はどうもあるとは信じられない、吾々の偉いといふ所は上に萬世一系の　天皇を戴いて居るといふ丈である、其他の點に就きましては英國にも米國にも比して學問はどうであるか、殘念ながら及ばないのである、日露戰爭の時に印度の或る所から法華經の原文を見出して、之を日本にて出版しやうとしても日本には金を出す人がないので、露國の或る人が金を出して出版したといふことである、戰爭は日本では勝て居るが、學問の方では露國が勝つて居る、敎育はどうであるか、殘念ながら學生の學力は十年前の學生の力よりも落ちては居らぬが、學校へ行つて見ると授業豫定表抔があつて立派であるが、學生は溫和になつて鼻載は宜いか、學力はどうであるか、敎へて居る人は興味を以て敎へて居るが、餘り型に入れ過きはせないか、餘程今日は考いなければならない問題であらうと思ひます、是は私は生徒の數と云ふものは必ずしも敎育の進步といふものを意味しない、敎育に依つて引延ばすけれども鍛いるといふことが出來ない、それであるから秀れたる人間が出ない風が吹けば飛ぶやうな人間になつて了ふ、衞生にして本統に丈夫の人間を作らうといふには、時々腹に障はるやうなものも食はなければならない、何時も粥許りでは宜しくない、一日位食はないでも差支ないやうにならさなければならぬ、學問の方でもいつと易すくするもつと易くするといふやうに平易々々と赴いて居る、もう十年も經つたら學校で白紙でも用うるやうになるかも知れない、唯骨が折れないように折れないようにといふこと許りに工夫して居る、總て世の中がさういふ風に向いて來て居る、それであるから少し六ケ敷ものでもあれば直ぐに腦病でも起すやうになる、一時の間に合せのこそくり許りを

やつて居る、凱旋門の出來た時に宇永久的の建築といふことを言はれたが、能く此言葉は今日の時勢を顯はして居ると思ふ、是から後に列國の競爭場裡に立つて進んで行かうといふのには、大いに覺悟をしなければならないのであります、金の上から言つても現在の日本はどうであるかと言へば、先づ人口を五千萬人として一人前が日本の富は六百圓宛である、それは岩崎三井普通の裏店に住つて居るものも、平均して居る話である、それから入費といふものは銘々平均した處で五十二圓餘といふことである、之は赤坊迄の平均である、私共五人の家内が居れば詰り其五倍である、一年に二百六十圓の入費である、日本では富の程度が低いのに斯かる澤山の費用を要するのである、それで國債の元を返へさなければならぬから容易な譯ではない、一人平均五十圓以上も返へさなければならぬといふことは容易なことではない、それに又利息を拂はなければならない、一人前が赤坊迄も一圓八十錢の利子を拂はねばならぬ、我國は實業といつても大した發達はしない、學問といつても大した發達はしないにも拘はらず、戰爭後日本の國が外國に知られてから、どの國も日本に對して競爭を挑んで來て居るのである、其相手にならぬといふ譯には行かないのである、それ相當にやらなければならない、それでお互に租稅といふものを負擔して居る、誰も所得稅及び營業稅を取られて居る、汽車に乘るにしても通行稅を取られて居る、酒一杯御馳走になつても稅が掛り、砂糖にしろ着物にしろ皆稅を取られて居る、日本人の一人前の負擔といふものは十圓と九十四錢である、隨分苦しい狀態である、實に吾々の前途は苦しいと言なければならぬ、併し金が幾らあつても國は盛にならぬのであります、支那の國を御覽なさい、支那には實に非常に金持があるけれども支那は全體の整理が付いて居らない、國民思想がないからである、支那はあれ程の土地を有つて居つてあれ程澤山の人民を支配して居つて、一地方に革命軍が起れば政府に於ては袁世凱が三ヶ月の日子を得て兵士を調練し、それから出掛けるといふやうな有樣である、日

本は是から後を考へれば富を作るといふことは一つの問題である、吾々は人を作るといふことが大切であると信ずる、是から後の人は甘くやるといふ人許りでは宜ない、六ヶ敷ことに出會つて逃げたがるやうであつては宜しくない、火事の時には怒鳴ることを先きにやるのも宜いが永ぐ以て消す人が欲しい、水を以て默つて行く人が欲しい、總てが實行を爲すやうにしたい、今の時代は餘り利巧過ぎるのである、都會にても地方にても身分不相應に着物を着たり贅澤なる生活をして居る、借金をして美しい着物を着て居る、人を御馳走をするのに身分不相應のことをやつて居る、一年に一度二度しか甘いものを喰べもしないのに、御客に對してはそれと同じやうな御馳走を出して、平常有あひの御惣菜の御馳走だと言つて居る、それは平常の通りではみつともないからして張込んで御馳走をするのである東京では夏になると鎌倉逗子に行きまするが、何をして居るかといふと六疊一間を借りて涼をやつて居る、苦しみに行つたんであつて、涼に行つたのではない、國家を愛する所の士抔も他人から憂國の士であると言はれたいといふやうでは駄目である、そんなことでは六ヶ敷事に出會つて脊負つて立つといふことが出來ない今後に於て利巧の人は今日位あれば澤山である、是以上要らぬ、是から後の人は人の見ぬ時には遊んで居り人の見て居る時は働くといふやうな蔭日向の人のないやうにしたい、眞面目に働く所の人が欲しい、そういふ人が集つて國の本統の土臺となつて働くやうにしたい、默つて働く人が減るやうであつては其國は亡ぶるのである、德川時代に於いて本を讀むといふと牢屋に投り込まれたものである、そういふ時代であるから默つて働いて默つて死んで了つて後世に名の出ないものが澤山ある、併しそういふものが土臺になつてそれから西鄕木戸大久保と云豪傑の光を放つやうになつた、是から後日本の國に立派なる國民を作るといふ上に就ては、吾々は甘んじて其踏臺となる覺悟がなければならぬ、それでなければ今後此世の中のことを引受けて行くことが出來ない、此覺悟が付くと付かぬとい

ふことが問題である、今日の世の中を見ると間に合せ許りである、東京邊りで左側を歩けといふても兵隊は、右側を歩けといふことを訓練されて居る、それであるからさういふ場合にはぶつかつて了ふ、警視廳にては左側を歩るけ、兵隊の方では、右側を歩けといつて居る、是は一つの例であるが、總てこんな風である、夏休杯もさうである、銀行でも會社でも皆夏休はなくてやつて居る、學校丈が獨り休んで居る、果して是は休んで宜いか惡いか私は存じませぬが、さういう有樣である、私は明治時代は二つに切らなければならぬと思ふ、一つは歐羅巴の文明を入れて來た所の間に合はせ時代である、一は明治四十年の先きで是から足並みを揃へて行く時代であつて、列國と競爭をして行く時代であつて、今後の遣り方は今日迄よりも二倍も三倍も苦しいといふことを覺悟しなければならぬのであります、さういふやうな氣運に見えまする、然るに世の中の人は此種々なる困難に打勝つて行くといふ氣力が乏しいのであるから、今後の問題としては二つ起つて來る、一つは樂にして世界各國と競爭をするといふことを止めにすること、さうして苦しいことを取除けて了ふ、それからもう一つは世界各國と競爭をして見やうと云ふのである、而し樂はしたい世界の各國と對等になりたいといふことは出來ない話である、樂がしたければ世界の各國と交際することを御免を蒙るのが宜い、さもなければ一生懸命になつて、働いて續けて行くといふには苦しいことを我慢して乘切つて遣らうといふ所の奮發心がなければならぬのであります、私自身の考から言つたならば、もう斯うなつた以上は日本といふ國は後に引いて世界の各國と交際の御免を蒙つて二等國三等國で宜いといふことは出來ないのであります、日本は一等國になつたのであるから今更後に引く譯には行かない、今後は二倍も三倍も奮發を起すといふより外はないのであります、而して之をやつて見やうといふには確然たる所の覺悟がなければならぬ、それには、どうしたら宜いかといへば、其國の人の了見を改むるより外はないのである、之は迚も一時やつて見やう杯といふ考では宜くない、一時なれば我慢が出來まするが百年二百年といふ長い年月になつては容易のことでない、此長い間の競爭といふものは、お互に日本人といふものは大いに努めなければならぬことであります、それには始めの問題に返つて吾々が世の中に活きて居る價値を認めなければならぬ、生きて居ることは貴いものである、生きて働くことは面白いことであるといふ了見が固たまらなければ、今後の日本に立つて行くことが出來ない、世の中が面白いか苦しいか、お互に腹の中に問ふて見て、それでは雨立しないと云ふならば止めて了はなければならぬ、人間を辭職しなければならぬといふことになるのであります、世の中は苦しいから辭職しなければならない、そんなら死んだらどうかと言へば死ぬといふことは忌やなものである、私は死んだ實驗はしないが死ぬといふことは忌やらしいものである、其證據には鐵道往生のやうなものでも、大概機關車に頭を打付けたり或は肩を挫いたりする人が多い、生きて居る中は苦情を言ふけれども死ぬ間際には逃げたがるものである、どうかしてさういふ時に出會つた時には、生活の價値といふものを認めて生きて居るやうに致したいと思ふのであります、此世の中は苦しいものであるが、此苦しい中にも其價値を認めてさうして生存して居るやうに致したいと思ふのであります、世の中は段々と複雜になつて行きます、世の中は始終動搖をして居る、年齡が十も違ふともうお互の間に於て分らぬことがある、私共が二十代の人と話をすると向ふでも相手のいふことが分らない、それであるから兄弟夫婦の間にてもさうである、親と子との間に於ても全く意見の合うといふことは今日の時代に於ては望まれない話である、相互に思違ひをして居る、親と子と夫と妻と姑と嫁と表面は美しくあつても內情に於ては其處迄行つて居らぬ、すつかり分り合ふといふ所迄には行つて居らぬ、先生と弟子との間もさうである、骨を折つたからといふて其れ丈の骨折りは世間にては認めて呉れない、それであるから十の骨折に對して十丈の報酬の無いといふことを

覺悟しなければならぬ、自分の骨折の價値を認められない、又それ丈の報酬もないのであるから、吾々は毎日々々失望しなければならぬのである。斯ういふ時代に生れては人が譽めて呉れても呉れないでも、働きといふことが貴いものであるといふことを知るべきである、働いて譽められなくても立派なる報酬といふものは其中にあるといふ其覺悟は、何に依つて得られるかといふと理屈に依つて得られるものでない、それは信仰に依つて得る外に途がないのである、吾々は理屈なしに唯尊い教に依つて心の底に浸み渡つて、此人性といふものは困難なるものである、世の中といふものは困難なるものである、人間が人間として眞心から出た仕事といふものは、それは世間で見ても見なくも其仕事は深い尊い意味のあるものである、それは信仰に依つてすつかり腹の底に浸み渡つて居て始めて人は何といつても言はぬでも立派に行ふことが出來るのである毎日詰らぬと思ふ仕事を信仰の目を透して見た時にはそれが尊いのである、それであるから報酬といふことが要らずに眞面目に働かれるのである、宗教といふものが現實の吾々の生活に全く無關係であるからば、さうして吾々が此世の中の仕事を樂んでやつて行くといふ氣力を與へて呉れぬのであつたならば、神樣も佛樣も地獄も極樂もそれは吾々にどういふことになるでありませうか、吾々に恐らくは何の意味もないではないか、此現在の此世を救ふことが出來ないものに、どうして彼の世を救ふことが出來やうか、此苦しい世を渡つて行けるのは信仰の力に依るのである、それには此日蓮の教義を信じて働くやうに致したい、此信念を以て仕事をする時には毎日眞面目に清く仕事が出來るのである、さうして自分は佛となり得ることが出來る約束がある、此約束を吾々が守ることが出來たならば、世の中を胡魔化して渡つて行からとしても渡れない、此日蓮主義の信念を以てしたならば其仕事を果たすことが出來る、其心持を以て仕事をすることが肝心である、斯ういふ覺悟を以て本を讀み算盤を彈き田畑を耕すやうに致したい、さういふ考を以て自分の仕事を樂

んで自分の仕事に興味を持つて進んで行くと、世の中にて失敗しても金が無くても面白い、金があれば尙面白い、自分が世に立つた以上は六ヶ敷仕事を引受けて行くといふ人間を作ることが必要である、今日の流義であつては本統の人間は出來るものではない、彼の日蓮は安房の國の獵師の悴である、諸君と異つたる所はない、既に法華經を讀んでそれを信じた時にはどんな苦しいことがあつても平氣である、首を切らるゝ時でも喜んで笑つて居る、佐渡に於て雪の降る時電の閃く時でも、食ふや食はずであつても、日蓮は日本第一の富めるものである、日本第一の幸福なるものであるといつて平氣で居られた、日蓮上人の其氣力は信仰に依つて得られたのである、彼の世に於てどうなるといふやうな信仰ではあゝいふことは出來ない、その信じたことが行に顯れたのである、其事蹟は今殘つて居る、吾々は凡夫ではあるけれども、彼の上人を尊んで信仰を得て同じ氣力同じ力を得て仕事を努めて行くことが出來る、日蓮上人は其信仰を以て實行されたのである、人間は苦しまなければ立派なことは出來ない、今後の日本人は樂を求めるよりも苦を求むるのが宜い、樂といふものは其處に落ちて居るのだと思はないで、苦しみの向ふに樂みのあるといふことを認めて眞直くと突進して行く覺悟がなければならぬ、法華經の教義を身に行つて進んで行く日蓮は、自分の身を以て大勢のものゝ苦を引受けて大勢の人を助けられたのである、夫であるから彼は日本一の富めるもの日本第一の幸のものであると言はれて居る、諸曲を謠ふものはうらとといつて苦しんで居るからさう苦しいければ止めたらどうかと思ふが、さうやつて居る中に面白味が出て來るものである、苦しみの中に樂しみといふことを求むるの覺悟がなければならぬ、もつと大きく言へば、人性といふものは苦しい眞中に樂しみを求むるといふことを忘れてはならない、それで要するに生活の價値といふことを知らうと思へば、どうしても生活の中に自分の身を投じて其事に價値を認め、活きて働いて行く丈の覺悟がなければならない、其覺悟といふものは信仰に

依つて得られるのである、政治を爲すものは當局に於て爲すのであるけれども、國民は皆政治の興味を持たなければならぬ、さうして國民の間から國會議員を選擧して政權に參與するやうにしなければ完全なる政治といふものは出來るものではない、宗教も矢張其通りであります、今日吾々が行つて行く仕事といふものは、宗教に關係がないといふことは言へない、どんな仕事でも之を爲すに就いては確乎たる所の覺悟がなければならぬ、それは信仰を通して與へられるのである宗教といふものは決して坊樣の專賣に屬するものでない、要するにお互に之を知らなければならない、役人が仕事をするにしても坊さんが仕事をするにしても、人民は宗教家を監督して宗教家の世話を燒き、宗教家に又世話をして貰ひ、さうして一緒になつて世の中を堅めて行かなければならぬ、今後に於ては吾々は宗教に對して宗教の專門家のみに賴ることは宜しくない、宗教は決して宗教家の專門のもの許りに委して置くことは出來ないのである、何人と雖も信念を持たなければならぬものであります、其信念には種々ありますが其中にも最も善く最も秀れたるものに力を入れて遣らなければならぬ、私の家は日蓮宗ではない、私は日蓮宗の信徒でない無關係でありますが、自分は今の日本に於て上人の教義は適切たるものと信じて居ります、私は日蓮の崇拜者信仰者であります、偶々日蓮宗の學校に行つて教へて居るのであるが西洋の哲學を教へて居るのである、其無關係の私がお話をするのであります、其無關係の私が此世の中に立つて種々酷しい目に遭ひ、其中に種々宗教のことに就て調べました結果、自分は日蓮の教義を崇拜することになりました、それと同時に教へられたる道を說くといふことは、是即ち上人の教訓に基いて主義の實行を致した次第であります、

（栃木行學會講演）

御製松上鶴　　代議士　板倉中

君が代のいくちよかけてさかえゆく
まつか枝をめて鶴うたふなり

伊豆伊東の御靈蹟

關田養叔君

△伊豆の伊東といへば、日蓮聖人四大法難中の靈地として、苟も本化の流れを汲むものは何人も能く知る所であるが、予が少年時代より眞實傳等によりて得たる記憶は、由井が濱邊に於ける船出の光景や俎岩の上に捨て去られた狀態などが、何となく一種の悲絕凄絕の感を與へて、龍口や佐渡よりも悲痛慘憺の印象を深からしめし趣がある、勿論これは比較研究の上で言ふのでなく、何んだかそんな感じがするのである、龍口の引廻のありさまや、佐渡の雪中の光景は、實に悲絕慘絕のものであるが、併し寧ろ是れらの感じよりも『日本國の柱を倒すか』とか、『臭き頭を捨てゝ金色の如來と成る』とかいふ言動や、更に進んでは上行の自覺、大本尊の光顯等により、凄慘悲痛の境を超越して、崇高偉大の念に打たしむるのである、こんな譯からして、伊東の御靈蹟は、他の小松原のや龍口や、佐渡のよりも、何んとは無しに悲壯の感を與ふる趣がある、

△予は久しき以前より伊豆の御靈蹟を踏査して見たいといふ考を有て居たが、日頃多忙なると、これ迄一度もその機會を得ざりしが爲めに此の宿望を果すことが出來なかつた、然るに幸にもといふと少しおかしいが、實の所幸にも、昨年夏頃より心經衰弱とかいふハイカラ病にかゝり、これが爲め、鼻や喉などを治療した揚句、どこかへ轉地靜養をすることになつた、乃で同じく靜養を試むるならば御靈蹟を探査旁といふので、伊豆の伊東に遊ぶことゝなつた、

△伊東といふは伊豆半島の東海岸に在る一勝區であるが、今日では舊の五六ケ村を集めて伊東町と稱して居るが、日蓮聖人流罪當時の伊東とは大に異ふて居るやうだ、聖人當時の伊東は、御遺文等に依て考察して見ても、餘程廣い區域を云ふたらしい、即ち伊豆半島の大部分を伊東の鄕といふたやうだ、

△聖人が、北條長時の爲めに、伊豆に配流せられた

のは、弘長元年五月十二日で、御年四十歳の時である、伊東の地の古老の言ふ所によれば、配流の當時、西風が激かりし爲めに、地頭の居住地たる今の伊東へ船を寄せることが出來ないので、止むなく此地より約四里を隔つる篠見ヶ浦即ち今の日蓮岬の方へ船を寄せたのだといふことだ、これは如何にも其のやうに思はれる、

△聖人が伊豆に初めて上陸したと稱する、俎岩の海岸は、伊東町より約四里を去る對島村富戸の篠見ヶ浦にあつて、此の海岸の突出せる邊を日蓮岬と稱して居る、此の日蓮岬の上に、海岸山蓮着寺といふ寺院がある、其の名に依て推察せらるゝ通り、これは聖人が伊豆到着最初の地たるを意味して居るので、此寺の開基といふべきは、小田原北條に屬する今村若狭守であつて、これは伊東の領主であり且つ非常なる法華信者であつた、聖人の高風德光を追慕するの餘り、聖人の上陸地の煙滅せんことを恐れ、こゝに庵室を設け、聖人の像を安置し、侍臣をして交る〳〵これに居らしめ且つ僧を請して絶えず讀經唱題せしめて居つた、後萬治年間に本妙法華宗の僧日靈なるもの、此庵室を寺となし初めて海岸山蓮着寺と稱した、日靈晝は村里に出でゝ行脚し、一紙半錢の徴を貯へて寺門造營の費に充て、夜は竟夜唱題三昧に祖恩報謝を專らとし、終生を此の靈地保護の爲に捧げたのである、

予が此の寺に詣せしは、客年十一月廿二日であつたが、伊東町より大字富戸に至り、此の村はづれに海岸山蓮着寺と題したる寶塔石の建てるを見た、里人に是れより寺は何程あるかと尋ねたところが、約半里位といふ、非常な難路を喘ぎ〳〵て登り、行けども行けども、寺を見ず、後又之を里人に問ふに、山坂の難路なれば、約一里位はあるべしとのことであつた、實に此の寺は、言ふまでもなく前は渺茫たる海原であつて、漁村の人家は一里の路を下るに非れば見ることは出來ないのである、斯る寂寞無人の地に寺を創し終生を此の山寺に送ることは、道念なきものゝ能くすることでは無い、予は實に古人の祖恩を思ふこと深きに感泣し

た、此の寺の直ぐ下は荒磯であつて、こゝに有名なる俎岩は其の凄き形體を現はしたりして居るので、蓮着寺は此の萬代かわらぬ靈蹟を記念せんが爲め建てられて居るのである、

△俎岩は蓮着寺の本堂より右へ降ること僅にして、荒磯に出で、こゝに無數の險巖危石は磊々として横はつて居るが、此を蹈み傳ふて畔を放ては、傍には鬼神が手斧を以て切り離したやうな壁立千仞の巖石が聳えて居る、これと相對して海中數十間のところに凄き巨頭を現はして居るもの即ちこれである、干潮には顯はれ滿潮には隱れるので、聖人は北條家の殘忍極まる役人原の爲めに、茲に捨て行かれたので、此の俎岩こそ六百年來人工を加へざる靈蹟である、予は暫らく佇立し高聲に題目を唱へた、凜々として巖石を打ちては碎くる怒濤の音は、耳を聾するばかりであつた、我下脚に蹈める鋸の齒のやうな虎狼の蹲まつたやうな石、鬼の角のやうに働き出たる岩、何となく我五尺の身を襲ふ凜な氣持がした、身親しく其の境に望み、聖祖當年艱苦の狀を懷ふて、覺えず涕涙袖を濡ほした、そうして悲しいやうな尊いやうな力强いような心持がした、

△聖人は此の俎岩に立たせ給ふて御聲靜に讀經しつゝありし所に、折ふし漁聲をこぎ來りし船守彌三郎の爲めに助けられたのである、彌三郎は直に聖人を船に乘せ奉りて、川奈港の我家に伴ふた、川奈は此の篠見ヶ浦より約貳里で、今日では漁船等が澤山輻湊せる港である、彌三郎が其妻と共に三十日間聖人を惹くまい申して御供養致したといふ岩窟が遺つて居て、此の地の人々は之を川奈の御岩窟と稱して居る、聖人が『三十日あまりありて內心に法華經を信じ日蓮を供養し給事いかなる事のよしなるや、かゝる地頭萬民日蓮をにくみねたむ事鎌倉よりもすぎたり、見るものは目をひき聞く人はあだむ、ことに五月のころなれば米も乏しからんに日蓮を內々にて育み給いしことは、日蓮が父母の伊豆の伊東川奈といふ所に生れかわり給か』、『過去に法華經の行者にてわたらせ給へるが今末法に船守の彌三郎と生れかわりて日蓮をあはれみ給ふか、』夫婦

二人は教主大覺世尊の生れかわり給て日蓮をたすけ給ふか』等とあらゆる讃美賞歎の辭を以て、感恩の誠意を寄せられしは、此の當時のことである、

△此の巖窟の後方約二三町のところに、蓮慶寺といふがある、彌三郎五代の孫、入道蓮慶が、祖先菩提の爲めと、聖人追慕の記念の爲に、己が邸宅を轉じて寺となした、今は本門宗に屬して居る、彌三郎姓を上原と稱し、今日でも此の上原姓を名乘るもの甚だ多く、川奈村七十餘戸の内　四十戸は上原と稱して居る、彌三郎の後裔は其の何れなるかを知る能はざれども、聖人に關する事蹟を以て、上原の性は同地方に尊重せられ、上原姓と緣組するを非常の名譽と感じたのである

△川奈に居ること三十餘日にして、今の伊東の地に移つた、聖人が波木井鈔に、伊豆の國伊東の莊へ配流し伊東八郎左衛門の尉の御預りにて三箇年なり』と記されたるように、領主伊東朝高の監理の下に三年間謫居せられたのである、朝高の遺跡は、伊東町玖須美の佛光寺がそれである、同寺には朝高の系譜、木像、朝高及其臣綾部正清の墳墓等がある、當地古老の語る所によれは、朝高は、初め北條重時の知遇を得、後長時の命を受けて伊東の城主として聖人を監督したが、後聖人の法義に感奮し、深く法華經を信じ、遂には聖人の化導を助け、一族を擧げて改宗するのみならず、領内の人民をも勉めて改宗させた、これが爲めに大に北條家の迫害を受くるようになつた、聖人佐渡流謫の當時文永九年二月、北條時章を訴するに當り、疏を蒙り遠州浦鹿に遁れ、後又伊東に病を養ふた、剃髪して聖人の徒弟となり、妙法華院日預と號し、我が館邸を轉じて寺となしたのである、これ一は聖人の大主義に渴仰を捧ぐるの致す所であるが、今一つは北條家の憎惡嫉視を避くるには、寺と爲すの安全にして、且つ又永久に妙法廣布の願業を手傳へ得べしとの護法扶教の丹心より出だのである、朝高は聖人より三歳若く、伊東流罪の當時、聖人四十歳、朝高三十七歳であつた、朝高の墓は、其臣綾部正清の墓と相並んで、佛光寺の後方丘腹にある、朝高の方は、

伊東八郎左衛門朝高

南無妙法蓮華經　日預上人

建治元年二月十五日

正清の方は

貞和元年三月廿一日

正清墓

百十一歳去

と刻してある

御題　松上鶴　日航師

まつ日さすみねの松が枝いとたかく
千代よふつるのこゑぞゆかしき

建武二年八月二十五日楠公は法華經一部を自寫して某神社に奉納して宿願を能め其奥書に『夫法華經は五時肝心一乘の醍醐なり之に依て三世の導師の經を以て出世の本懐となし八部冥衆は此典を以て護國の依憑となす』と云ふのであつた　（白碧誠）

法鼓

東京天晴會

◎明治四十四年の我邦思想界は混沌として危殆に陥り國民は其進路を失ひたるの觀を呈したりきされば久しく物質の文明に酔ふて精神問題を輕視したるものも大に心動きて思想の問題を議するの傾向を生じ政府も教育家も宗教家も皆共に國民性の發揮に心を用ふるもの多かりき斯かる思想變革の起りし四十四年は特に日蓮主義の隆々たる物興を促がし天下の識者驚然として之に集り日蓮主義を語るものにあらざれば國家論面に現はれたる大問題を談ずるの資格なきが如く王侯冥合の大理想に向て時々刻々に進みつゝありしは聖日蓮の靈感加被に因ることゝは言ひながら日蓮主義が如何に國家の精髄を發揮し國民性の啓發に適切なる大德教なるかを知るべき也東京天晴會は各種階級の名士を網羅し而かも何れも敬虔なる態度を以て日蓮主義を仰信し身讀し「宮仕を法華經と思召せ」との聖訓を体しつゝ信仰と生活との交渉を圖り「隨力演說」もあるべき歟」と仰せられたる聖訓を實行しつゝあるが四十四年の納會は十二月九日九段飯上僧行社に開けり幹事開會を宣するや高島平三郎君は理想の價値を題して解説なる現實主義の誤りを匡し人生に於ける理想の必要なるを說き更に語氣を強めて云く近來何れの國でも道德宗教に心を向けて來たが自然を征伏する奏はれが大事である自然界の事を使ふて行くことは心的で世の中は物質のみで行かぬ理想に向て來たが今少し進めて理想が如何に價値あるかを知られねばならぬ理想のない個人國家は存立が出來ない宗教も而うである本尊と云ふ大理想がなければならぬ宗教は理想の生産物である吾人は必ず理想的人格を要する此の人格がありて始めて眞實の力が表はれて來る我天晴會員は日蓮上人を理想の中心に指いて之に依て理想の力を得なければならぬ」と例の平易簡潔の句調をもつて諄々說くこと一時間半能く日蓮上人の理想的人格なる所以を論明せらるる終て晩餐會は開かれ席上姉崎博士は起て歳晩の所感を述べらるる云く「吾々はまだ赤兒であつて東西も分らぬが幸にして親切なる乳母によりて年一年成人して行くことが出來る日蓮上人と云ふ乳母によりて育てらるゝならば立派なる人になれる」と說き幹事は新入會員を紹介せり

法學士　矢野恕君
元日本鐵道創立者　林謙德君
實業家　伊東泰二郎君

晩餐後感想談に入る本多大審正は林中將よりの通信を介し日蓮主義物興の大勢を述べて更らに新たなる四十五年の天地に活躍努力すべきを警ひ協田審正は九州巡教中の信徒の態度を評論し信仰に活きて眞面目なる研究を遂ぐべきものなりとて日蓮主義者の地位を明かにし松本幹事は支部設立に關する意見を陳べらる會員何れも歡談笑語和氣藹々の裡に散會したるは午後十時なりき

地明會

◎本會生れて日尚淺く講演會を開くこと六回に過ぎざるも上人の人格に敬慕の念あるものは競ふて相集まり愼重の態度を以て修養の道程を辿り且毎會名士の有益なる卓說を敬聽するを得て益々上人の品性を高め信念を培養するものあり十二月六日午前十時青山安川邸内に開く嚴肅なる法要を修したる後本多大審正は道德の大事なる所以より說き起して上野抄の聖文を引き世間道德と佛教の道德とを詳論し人は須らく道德的生活を送るべきことを多くの例を引いて其實踐躬行を勸め多大の感動を與へたり同會員は一流紳士の夫人又は婦人教育をうけたるもののみの集りなれば其効果また著大なるものありと云ふべし

第一義會

◎十二月三日例會を開く吉田弊議士は議多惡思想の傾向を慨き日蓮主義の正信に活きよと述べ井村審都は信々精神の進みなき事實を述べて宗教信仰の理想を慨き法悅の生活に入りて永久不滅の境涯に遊ぶの自覺あるべしと教へ一段の信念を養ふ力を與へて散會したりき

妙教婦人會

◎十二月十六日午後一時より開會例の如く本多大審正の導師にて國運の榮と法の弘布を祈りたる後開田審都は伊豆巡遊所感と題して上人流罪の當年を偲び上人の伊豆御生誕は今日の吾々の爲なりとて感慨の念を現て敬意と感謝を捧ひ本多大審正は歳晩の感と云へる題下に人間一生の七顚八倒の慘狀を陳べ宗教は之を救ふものなりとて日蓮主義の信仰生活を懇說して其尊きを知らしめ雷肉調和の眞義を覺らしむるものあり眞に有益なる講說にてありき

知見會

◎十二月十日第二例會を淺草慶印寺に開く山根審正導師の下に法味を捧げたる後法學士小西眞樂君は倫理道德上の諸說を述べて宗教上の德教に及び根本法は法華經に存する所以を論じ野口審正は知見の意義に就て多くの事例を引いて懇說せられたり聽衆八十餘名能く熱心に傾聽し散會したるは午後五時なりき

交親會

◎品川正法護持會の有志は教義研鑽のために毎月二十日を會合日と定め既往二ケ年間品川珍蓮寺を會場とし熱心に求道の志節を進めつゝありしが今回會則を定め會員六十名毎月一人金五拾錢の醵金し抽籤を以て京都本山大法會に參列することになり會合の當日は通俗講演を開催して沉く公衆の參聽を暖集することゝなりしと云ふ

養德兒童會

◎十二月十八日開催二百餘の兒童は嬉々として本堂に集り鈴川師山根師の御傳噺や修身の話などいかにも身に滲みたるかのやうに謹聽し菓子の配與及餘興ありて樂しく半日を送りて元氣よく家路に歸りきと云ふ

東海道教報

眠れるか死せるかとの評高かりし吉美鈔立寺白須賀鈔泰寺太田鈔安寺二川鈔泉寺等も日蓮主義物興の期運は今や其永眠を許さず白井高橋吉田猪野清水朝倉野中等の諸師發起となり去十一月十日會合協議の上聯合布教會なるものを組織顯正會と命名先づ開祖の靈場たる吉美鈔立寺に於て十二月二日發會式を擧行す當日は生憎雨天なりしにも拘はらず參聽者百六十午後七時に至るや簡單にして壯嚴なる法要を修し了つて清水師は「開會の緣」加藤君は「法悅に就て」の題下に述べ次に役場員佐原高次郎君は「日蓮主義と顯正會」なる題下に登壇し上人の主義が現代に緊要なる所以を說て顯正會設立の趣旨に及び其內規を朗讀し野中師は「史上より見たる日蓮」なる題下に上人の史上に於ける眞價を論じ朝倉師は「本佛の御敎」と題し世間幾多の信仰が佛陀の御敎に背き利の一點に纏せる誤謬を駁し次で吉田師は「須らく心賊を刺れ」の題下に登壇し滔々數處言痛快壯絕約一時間中の講演に亘り心賊の眞に畏怖すべきを說て妙法の利器之ぞ元品の無明てふ大賊を切る一大利劍なりと論斷し了て白井審都の「本佛導用」なる題下に簡易明解なる講演ありて午後十時半閉會せり因に吉津青年會長豐田吾吉氏は次回より嚴密に出缺の點檢を行ふと意氣卷居れり熱烈亦憶ふべし

十二月四日知波田村妙安寺に例會を開く聽衆約四十加藤師は本佛の實在朝倉師は本佛の御敎吉田師は正しき信仰なる題下に各熱烈なる講演あり聽衆の何れも歡喜と法益とに滿つ

豊橋教界

◎同地日蓮主義者は益々精進の氣を起して擴張の武歩を進め一流の紳士は皆競ふて此主義の下に集り熱誠の鑽仰者相謀りて天晴會支部を設立すべき盛運に至れり尙ほ同地の事業は近き將來に於て發表するの機あるべし

東海道顕正會

◎十二月十七日二川町妙泉寺に顕正會發會式を催ほした當日の來聽者は約八十名で午後七時に至るや國友嘉僧都は大導師となつて簡短で然も壯嚴な法要を修了して吉田師は「日蓮上人の奮闘」といふ題で登壇し上人奮闘の活歴史を述べて其奮闘は慈悲の結晶であつたと論結し次で國友文學士は「宗教の必要」といふ演題の下に登壇し凡そ人世を平等に根本的に救濟し得るものは獨り宗教のみである故に宗教は老幼男女の別なく貧富貴賤の隔なく俱に信仰すべきものであると懇切叮嚀に說いて午後十時に閉會し聽衆の何れも衷心歡喜と法益とに滿ちた

◎十八日太田妙安寺に婦人會大會を開いた聽衆は八十名で午後七時に高橋布教師が導師となつて大本尊の御前に誦經唱題し了て吉田師は開會の辭を述べ次で野中師は「尊上の樂と題して人生には畜生的道德的宗教的の三生活ある事を示し最後の宗教的生活が人生無上の生活であると說き高橋布教師は「宗教の本質」と題し流暢輕妙な辯舌を以て世人の多くが宗教の本質を誤解して家内安全病氣平癒と末葉に馳せて信仰の對象たる本尊の何物たるかは少しも攝ばないといふ惡を駁し眞の宗教の本質とは本門の本尊の御前に合掌禮拜して先づ我心の狂れるを正すにある事を述べ午後十時に閉會した

◎二十日敎田大會正の隱栖地である新所村妙經寺に顕正會發會式を擧た當日の參聽者は約百二十名で午後六時朝倉師は大會正に代て發會の宣言書を朗讀し了て加藤師は久遠の本佛と題して吾人が佛陀を大慈敎主と仰ぐ所以を說明し野中師は「穢れも赤淸し」と題して煩惱の雲晴るれば佛性の玉は直ちに活現するものであると說き朝倉師は「日蓮主義」と題して敬神の觀念統一主義の二大要義を論じ最後に吉田師は「須らく心病を治すべし」の題下に登壇し滔々輪河の辯を以て心病治癒の必要である事を論じ上人の主義は知情意の三面に亘つて眞の健康を保つべき無上法であると論結し滿座の聽衆をして醉はしめた因に特記すべきは當夜村内青年の全部約百名が敎師引率の下に來聽し號令を以て入り號令を以て出でたことは近頃の一異彩であつた

安州天晴會

明治四十四年十二月十六日を以て安州天晴會は全國の首腦部たる北條町に呱々の聲を上げたり全會の設立に就ては先きに日蓮聖人靈蹟保存會員の安房巡拜の砌北條町に於て日蓮主義大講演を開催せる當時天晴會を設立せんことを約し吉野喜智は發企人を代表して東京天晴會と數回の商量を遂げ今回發會式を擧くるに至れり而して其の特に安州天晴會と稱せしは「日蓮は日本國の中には安州のものなり。總じて彼の國は天照大神のすみそめ給ひし國なりといへり。かしこにて日本國をさぐり出し給ふ云々」の聖語に因れり今左に發會式當日の次第を記せんに。東京天晴會よりは小林文學士松本辯護士臨場せられ吉野庵樣上に於て總ての打合せを爲し次の順序を以て擧行されたり

一、劈頭予は司會者として開會の旨を宣し二發企人西尾貞遂聖語捧讀三、發企人部會議長明石重平議事長の下に趣意及會則役員滿定等諸般の議事を了り四、全氏式辭朗讀五、部長代理として中安書記祝辭を述べ次に松本辯護士東京天晴會幹事として祝辭を述べられ六、發企人中山智秀は野口日主會正三上統一主任より寄せられたる祝文を代讀續いて發企人吉野喜智は小原陸軍少將小笠原子爵本多大會正藤田會正矢野大審院檢事佐藤海軍大佐赤尾辯護士山田天晴會幹事等の諸名士より寄せられたる祝電を朗讀し七、天皇陛下萬歲を三唱八、安州天晴會萬歲を三唱して式を終れり式後更に日蓮主義大講演は開かれたり幹事高橋正男開會を宣するや予は兩講師を紹介し續たり松本辯護士登壇「日蓮聖人と法華經」てふ演題の下に一切經中に於ける法華經の位置及び各宗敎祖の之に對する見解を評論し進で日蓮聖人の人格及び法華經行者の功德を辯明して約二時間に亙る次に文學士小林一郎君は「日蓮聖人と日本國」てふ題下に先つ世界の大勢より列强の東亞政策等に就て詳說し更に日本現代の思想より人生の根本義を論じて大に國民的反省の必要を示し日本帝國をして世界に冠たらしめんには其の活動の原動力たるべき宗敎的信仰を要す而して其の信仰たるや日蓮主義大信仰に非らざれば現代に於ては價値なし是れ吾

人が日蓮聖人を讃仰し其主義を鼓吹して止まざる所以なり吾人は何故に國民の總べてが遠に日蓮主義を標榜して起たざるかを怪むものなりと論斷痛快を極めたり、滿堂の聽者感動指く能はざるものゝ如く學士の降壇せらるゝも退場せんともせず侯て幹事より閉會を告けて散會を促せり時に午后十一時。翌十七日は日曜のことなれば强て兩講師の滯在を請ひ聊か旅情を慰めんものと中餐後より吉野庵別莊に散策を試み小憩後法性寺に於て發企人一同と記念の撮影を爲し午后五時より吉野庵樣上にて一同と晩餐の宴を開き談笑聲裡歡を盡せり晩餐後小林講師には發企人及有志者の懇望を容れられ全庵廣間に於て有利なる講演あり一同心歡喜充滿して散會せり翌十八日兩講師は歸京の途に就くべく早朝發企人及其他の見送人に擁せられ堆頭に向へり曉天一片の雲なく、潮上些の潮波を見す、東天の旭日水面に輝き、芙蓉の英姿中溟に浮ぶ、旭日開宣の聖事遙に望む延山留魂の靈地アゝ皆歸妙法圓浮統一……忽ち蟲く中天の霹靂船は拔ぎ出づ續いて響く東京天晴會萬歲後の船……此の聲互に動く護影雜影、(終)

因に全會幹事の人名を擧くれば(いろは順

西尾貞遂、岡田直吉、吉野喜智、高橋正男

角田佳一、中山智秀、及び予の七名なり

齋藤貞雄記

新春の慶賀

自佗幸甚

（太田殿消息）

地明會

第一義會

妙教婦人會

日蓮主義青年會

新年之佳慶芽出度申納候

本多日生

謹賀新年

顯本法華宗宗務廳

野口日主

井村日咸

笹川眞應

三上義徹

恭賀新年

顯本法華宗評議員

今成乾隨

山岡會俊

鈴木日雄

中村乾信

井口善叔

謹賀新年

京都總本山妙滿寺

野老乾爲

銀井乾升

金光孝碩

川崎英照

賀正

京都久遠寺

坪永日監

賀正

顯本法華宗監督布教師

野口日主

野老乾爲

能仁事一

恭賀新年

教學財團

四海同慶

本堂新築の淨願を遂げさせ給ひ

北海道江別町法華寺

荒川智會

岡澤乾珠

顯本法華宗大學林
今成乾隨
關田養叔
井村日咸

千葉縣支學林
中田日達
山岡會俊
土齋藤海眞叔
大屋津賢容淳

祝歲旦

當年は年始狀缺禮仕候
小笠原島擔任教師
吉塚通榮

謹賀新年

岡山縣和氣本成寺
（改名）原田日勇

兵庫縣明石町大藏谷圓乘寺
內藤日郎

恭賀新年

顯本法華宗宗會議員
荻原啓門
中村乾信
大津賢淳
土屋眞容
秋葉純一
小竹俊雄
京藤義應
金阪義昌
夏目智誓
能仁事一
大橋日襲
朝倉俊達
前田日玄
墨照

謹賀新年

東京淺草新谷町慶印寺
山根日東

東京品川町
正法護持會
石川顯隆

會員
淺尾清藏

豐橋妙圓寺
文學士 國友日斌

大阪西高津蓮成寺
梶木日種

美作津山
山名日宗

美作飯岡村
紀野俊耀

丹波綾部了圓寺
木村義明

兵庫縣
高田日暢

法運萬歲

四海同慶

賀

賀

賀

賀

賀

賀

正

正

正

正

正

正

千葉縣
森川寬行
成島泰行
木村乾中
飛山日甫
小幡親正
石井寬俊
宮川光淵
横山會章
因幡善英

福井市相生町妙經寺
增田聖道

伯耆松崎會津妙法寺住職
窪田純榮

副住職
板本日桓
竹內無着

恭賀新年

謹賀新年

賀

賀

正

正

加賀
三須教英
田久保日城

謹而新年の吉慶

芽出度申納候

購讀者諸賢に望む

日蓮主義發揚普及のため
本誌購讀者勸誘を請ふ

統一編輯局

三上義徹

謹賀新年

併せて諸大德の萬祥を禱る
謹而從來の恩顧を謝す
尙將來の御眷顧を冀ふ

各本山御用 法衣商

京都市三條通烏丸東入
電話七百三十五番
振替口座一一、五五九番
草木伊助本店

東京市淺草區三好町二番地
電話下谷三四三四番
草木伊助支店

謹賀新年

鹿兒島

淺野常瑞

鹿兒島宮崎沖繩開敎本部起工式は一月八日此段贊助諸君謹告仕候

千葉町南道場秋葉總太郎方

秋葉日虔

賀正

自分儀今回千葉監獄敎誨師囑託せられ從事仕居候也

遠州見付

賀正

山本通辨

領收書

一金壹百貳拾五圓也 明治四十四年六月十三日即納

本宗寺院建設敷地購求費中寄附相成受納候也

神戸市兵庫大開通六丁目
顯本法華宗布敎所

主任 上田智量

右 信徒惣代 一同

信徒 山形勝一殿

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉强仕一切各宗の佛具陳列仕置候

正價附 三法堂佛具發賣目錄

小色絲例附(郵券四錢)

佛具と唱すれども諸君は御覽あれば御入用品は左の通り

此の種類數品有之候に付御入用の御送附被下度候。郵券四錢御送附被下候へゝ迅速呈仕候。寺院樓方の御入用品一切の買物何税遠方でも坐なから買物安價にでき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は佛具目錄書を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價附發賣目錄を作製致置候に付御入用の

注意

●佛壇一切●過去帳の類●大般若經●一切經●理趣分●位牌●太鼓●佛具金物一切●釣鐘●木魚●撞子●曲錄●香●珠數●大傘●扇子●中啓●鐘●半鐘●水引●打敷●和幡●唐幡●人天蓋●樂器類●旌●鐵鬼●幡●屋根●木像●厨子●木華●經机●盤子●案●懸鐘●燈籠●三寶●寶●並に平椅●駄●箱●獻●茶湯器●獻●菓子●奉●行鉢●座●量●香●白鉢●水●板●盛物●奉●高●皿●製●鼓●文庫●鐵具●鐘●檜●綫●香●香具類●正價附にして御買物坐なから自由自在

●佛具卸部 京都市三條通小橋西入 本舗 三法堂藤田總次

特電話二千七百八拾三番 振替貯金番號 大阪一四二五九 東京二〇七一九

●小賣部 同市三條通大橋西入 三法堂佛具陳列場

本多大僧正講演

法華經講演集

如來壽量品

價 金五十錢
郵税 四錢

橘香集

本多大僧正著

價 金二十五錢
郵税 金二錢

勤行作法

一部 金五錢
郵税 金二錢

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵税五厘 一ヶ年前金六拾五錢郵税六錢 代金ハ振替貯金口座東京一二一九番ヘ拂込マレタシ 此場合ニハ諸料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

明治四十五年一月二十日印刷發行

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 統一團

第二百四號

統一

「神道」と「日蓮上人によりて開顯せられたる佛教」
海軍大佐　佐藤鐵太郎君

在島三年
文學博士　姉崎正治君

拆伏逆化
東洋大學講師　境野黃洋君

三教會同に就て
三上白碧生

日蓮上人の御尊容と婦人の修養
東京美術學校教授　竹内久一君